

庶孽考（二）

——庶孽禁錮法令を中心として——

李 相 伯

それなら此等の禁錮緩和の運動は何れ程の効果をさせたであらうか。又禁錮法の緩和によつて許通された庶子の數は一體何れ程あつたであらうか。前に述べた、尹元衡の庶子に對して開いた許通も、此種の一例であるが、斯のような例に倣つて主として貴顯の庶子に文科、司馬試に上る特許を與へた數を一應考へて見る必要があらうと思ふ。勿論此間一般庶子に對しては「勿許赴試」の法令が嚴存してゐたのであつて、許されたものは少數の特殊な事情あるものに限られてゐたことはいふまでもない。たゞ此特許に内規標準の如きものがあつたかも知れないが、宣祖の時代に於ける政院の記録禮曹の謄錄などは、皆亡びて資料の現存するものがない。或はあの混亂せる戦時に徴して考へれば、別に一定した法規内約などはなく、その時と勢とに應じて許されたものとみるのが、却つて實情に即した見解であるかも知れない。兎に角斯様にして許されて「文科」に及第した庶子は、「國朝榜目」によつて調べてみれば、宣祖末年丁酉（同王三十年、西曆一五九七）から英祖初年

乙卯（十一年、西曆一七三五）までの間に、大略四十二人を算することができるようである。⁽³⁾又此間に於ける「武科」の許通についていへば、「武科」そのものが割合に意味の少ないものであつて、その殆んど凡てが單なる名稱を獲得するにすぎないものであつたといつてよい状態であつたが、その數の比率をみても、正祖の乾隆乙卯（十九年、西曆一七九五）の庭試文科榜目によれば「文科」の甲科一人、乙科二人、丙科二十一人、計二十四人に對して、「武科」は甲科一人、乙科三人、丙科四百九十六人、計五百人を數へる割合になつてゐる。今若し此等「武科」の及第者を居郷に區分してみれば、居京七十七人、居京圻府郡七十人、居平安百九十三人、居黃海六十四人、居咸鏡四十六人、居江原二人、居忠清十三人、居慶尙二十五人、居全羅十人、計五百人である。勿論此文、武の割合は一定してゐたわけではなく、文科が武科の倍になることもあるが、時としては一度に千四五百人の武科を取つたことさへ屢々あるのである。然し大體に於いて全國に及ぼした科擧は武科二三百人乃至五百人が普通であらうと思はれる。そして此武科の内譯についてこれをみれば、上に記したうちに「居京」といふ内の一割乃至二割位が、本當に武官の出世をする所謂「武班」となるものであつて、其餘の地方のもの九十九パーセントまでは、即ち殆んど凡てが、實職のない單なる肩書をえて終りをつげる所謂「先達」等である。これより推して考へれば、上にのべた李珥の「納粟許通」などといふものも、實は名義のみの議論であつて、身分の獲得といふことより他には大した意味はないといふことがわかるのである。それ故に、その「先達」なるものの中には怪しい素性の人物の多いのが當然であつて、魚叔權が「郷吏水軍、役之至賤、而猶赴科擧、云々」と憤慨したのも無理のないことといはなければならぬ。此武科の如き多數の許通を一時に見る場合では、その當時でも一々の人物の身分素性を充分明白にすることはできなかつたものと思はれ、武科の榜目の残つたものが今日殆んどないと云つてもよい状態は、この間の實情を語る一面ではないかと思はれる。

次に「司馬試」の生員、進士の許通状態については、司馬榜目の通編の如きものがなく、唱榜の度毎に活字によつて印出されたものがあるが、その奎章閣（今は總督府）に保存されたものの内では乾隆三十年乙酉（英祖四十一年、西曆一七六五）のものが最も古いものである。そしてそれ以降のものでも缺本が甚しく極一部のみが現存してゐる状態であつて、許通時代のもの殆んど皆無ではないかと思はれる。ところが偶然前問恭作氏の教示によつて、同氏所藏の刻板希觀本（顯宗）丙午司馬榜目抄（同王七年、西曆一六六六）に接し、此間の消息の一斑を窺ふことができた。それによれば「生員試」の一等五人二等二十五人三等七十人のうちで、庶子が二等二人三等二人あり「進士試」の一等五人二等二十五人三等七十人のうち、庶子が二等二人三等六人であつて、此年の式年試の生員、進士入格の二百名のうち、十二人の庶孽の名が見出されるのである。これで許通の大體の割合とその選に入る人物とが畧々推察できるように思はれる。

然しこれら所謂許通をえたものは、前にも述べたやうに何處までも特殊の事例に屬するものであつて、一般としては大典の「勿許赴試」の原則が嚴存してゐたのに違ひはない。只宜祖壬辰前後から英宗乙丑まで幾十年の間、此一便法を以て此非理不便に對する緩和の手段としたのにすぎない。然し固より時代を経るに従つて、その許通の數を増加して來た事實は、前に掲げた「國朝榜目」の内容を點検してみても分かる通りである。

ところが斯のやうに特別に通科を許される少數のもの外に、庶孽の禁錮法下に於ける運動方策の今一つの手段は、「冒科」即ちその身分を偽つて科擧に應ずることであつた。これには先づ朝鮮の科擧といふものが、支那に於けるそれとは多少趣きを異にすることを理解しておく必要があるのであつて、之れを以て直ちに官吏登用の試験と見做すことは出來ないのである。即ちそれには從來の朝鮮に於ける階級の等差とかその他の習俗慣行をそのまゝに保有しながら、たゞ體裁上或は風教、治安、朝權維持等の手段とする意味が多分に混つて、支那で行はれる形式を模倣してでき、それがそのまゝに發達したものとみるべき點が多いのである。それ故に朝鮮に於いては、科擧に上る事は必ずしも官吏になることにはならぬ。然し科場に出入するといふことは一種の身分の表示となるために、此身分の公認を獲んとして、庶孽はこれを企てることに浮身をやつすのである。朝鮮に於い

ては科擧に當つて試卷に記す名錄に、現住地、姓名、字、生年干支、八代父祖、外祖、妻父名、本貫居郷などを具載しなければならない例になつてゐるが、此中、生年干支は年齢制限の爲めであり、八代父祖は八代仕宦者の有無（そのない場合は「幼學」を稱することができず、従つて赴科の資格がない）外祖は庶出でない爲め、妻父は通婚先の如何などを表明する必要からであつて、これなども支那の科擧の制度には見られない現像である。斯の様な嚴格な身分制限の科擧に應じ科場に入するといふことは、即ちこれに相當する身分の所有を公認される所以であつて、この權利を得ることは官吏任命の事實如何を別として、庶孽の大きな野望目標たるに充分なものがあつた。然しそれはいふものの實際の場合をみれば、庶孽の遠孫かそれとも何者か分らぬ程の微身のものならば、此冒科も不可能ではなからうが、父祖等が高位兩班として人も知り世間も認めてゐるやうなものにとつては、これも成功する可能性の甚だ乏しい手段であつたに違ひない。即ち魚叔權が「郷吏水軍、役之至賤、而猶赴科擧、語其内外世系、則初無本貫可據、或嫁流民、或娶逃人、誰能辨其良賤哉」と憤慨してゐる所以である。此魚叔權の辭にもあるやうに、一般の場合は戸籍の不備な爲め、良賤の區別さへつかないことが多かつたのであるから、況して嫡庶の區別などは一々明白に知れない場合も少くなかつたであらうし、殊に移入逃民の場合に至つては、とても一々判別することができたとは思はれない。魚叔權は明宗の時の人であるが、此様に身分を偽つて冒科する手段の最も多くとら

れたのは、何んと云つても壬辰の亂以後で、李德沔も「我國公道、惟在於科擧、壬辰兵亂後、世道大變法綱解弛」⁽⁹⁸⁾と云つてゐる位である。又宣祖三十八年（一六〇五）の記録には「設庭試、試詔題、凡科題之癸詔制矣、至是乃始」⁽⁹⁹⁾とあるが、増補文献備考には此條の下に「舊制、應擧者、或四祖有庶孽、或爲公私賤、或四館停擧、或名在罪籍、或作變姓名、不許赴、俾受先生六品以上署押爲證、中世此法漸解、爲先生者、重士子應擧、不論知不知、署押與之、士子亦多向壁僞署錄名云」と註してあつて如何にも應科者の身分調査が弛んで來たことを指摘してゐる。加之、此時代に殊に科制が甚だしく紊亂してゐたことは、前記李德沔も前文に續けて「其弊漸至滋蔓、至癸朝（光海明）極焉」といつてゐるほどであつた。又李睟光も「高麗忠肅王、始令舉子、談律詩一百普通小學五聲字韻、乃許赴試、而本朝則只錄名入試、故近來場屋不嚴、舉子目不知書者、稱以隨從、至於胥吏賤類、亦多濫入、代書借述之弊、不可禁遏、混雜極矣」⁽¹⁰⁰⁾とこれを指摘して居り、光海朝に於ける科場行私の弊については燃藜室記述にも多くの例が引かれてゐる。これによつてみれば、此混亂の時を利用して庶孽の冒科したものは多數に上つたであらうと思はれる。そして此手段はその後になつても依然多く襲用されたもので、孝宗二年（一六五一）備局の啓に「先朝申飭、亦非一二、而紀綱解弛、人不畏法、庶孽之未許通者、偃然赴試、該掌之官、亦不得致察、曉然錄名、以致人々玩法、國試混淆、寒心」⁽¹⁰¹⁾とあることや、又孝宗九年（一六五八）の備局の啓にも「請申嚴庶孽許通法、冒赴而現露者、直定軍役、循情而許錄者、論以重律」⁽¹⁰²⁾とあることなど、如何にも斯かる徒輩の多かつたことが推察できる。又實際の例としても、ずつと後年社會も政狀も遙かに落付き此種の時弊の割合に少かつたと思はれる英祖辛未（二十七年、西曆一七五一）でさへ、「二月十一日、正言李弘德達曰……左通禮禹景漢、地處卑微、分館之初、欺蔽一世、猥屬國子、前復踐歷、圖非過濫、官方失宜、同列爲羞、請亟令汰去……禹本庶孽……禹事依違」⁽¹⁰³⁾などの例があるのである。

此冒科の多かつたことは、嘗に庶子身分のもののみならず、奴隸でさへがその身分を僞り姓名を變へて科に應じたのであつて、於于野談には、「宣廟癸巳、永柔行在、取武士二百、時邦禁不嚴、公私藏獲、亦赴試竊科、李恒福對客呼奴僕、不應、恒福曰、可惡、是漢必赴試去、滿堂大笑」⁽¹⁰⁴⁾の如き笑話さへあり、英祖元年（一七二五）には、「増廣殿試、全義官奴李萬江、變姓名、爲嚴宅周、冒赴、中丙科、乙丑因臺疏發覺、削科嚴刑、黑山島爲奴」⁽¹⁰⁵⁾の例もある。そして此間庶子の地位身分を冒稱することが如何に盛んに行はれたかは、英祖二十年（一七四四）に編纂された續大典に「庶孽許通納米赴擧之規、永爲革除」なる規定の條下に註して「士夫妻子、冒稱幼學者、降定軍保」⁽¹⁰⁶⁾と特に記してゐるのを見ても分かるが、此身分冒稱の弊はこの後も却て益々甚しく、丁若鏞（一七六二—一八五六）も「牧民心書」中の戸籍條に「増年者、減年者、冒稱幼學者、僞載官爵者、假稱嫗夫者、詐爲科籍者、並行查禁」⁽¹⁰⁷⁾と云ひ、その註に「科無鄉擧之法、故猥雜者、皆入科場、由此而冒稱幼學、雖

公賤私賤、皆得冒之、將使通國之民、都作幼學、蔑分亂名、莫比爲甚、管子曰貴人多則其國貧、我邦之謂矣」と歎じてゐるのみならず、彼れが縣令として實政に當つたとき戸籍の整頓を思ひ立つて、「僞稱幼學、僞載官爵、罰徵米五斗、其餘罰徵米一斗」したところが、此様な輕度の罰則にも拘らず、彼れがその官を止めて歸る時「百姓送之曰、他事皆善、惟冒稱幼學、查之太酷」⁽⁹⁾と云つたといつて、「大抵綱紀之頹敗久矣、非一縣令之所能振整、艱築沙堤、水到還崩」と慨歎してゐる位の状態であつた。

庶孽冒科の原因として、科法の弛解と科場に行私の弊があつた事は前に述べた。ところが此後者の科場行私の場合に於いても、庶子の活躍は見落せないものがある。前記李德洞の記述によれば「實由權奸當國、久秉文衡、屢主試院、欲廣試私黨、以張已勢、凡大小取人科場、必預出書題、使門客族屬之乳臭子第、前期借述、作備於車天輅、濫觴於李再榮」⁽¹⁰⁾とあるが、此李再榮なるものは「府尹選之妻子、能文、尤長於四六」であつて「登魁科官、至通政郡守」であつた。そして此李再榮については、思翁漫錄にも「題雖預出、其中不文者多、故猶不能自作、而能作者、惟李再榮李潛宣世徽等數人而已、每當科期、各以氣勢爭奪、故數日之間、輒易三四處」⁽¹¹⁾と云ひ、又「再榮爲高陽郡守、時監司以面議事招之、俄而其子登科、時人有詩曰、高陽太守去來忙、方伯門前慶事昌」と記されてゐる。以て此問の實情を察することができる。そして又李再榮が文才に富んで、權家子弟の爲めに借述することに多忙であつたことを推測することができるのである。

庶孽が禁錮の法令に抑壓せられて、その野望を伸ぶるに由なく、遂に亂を思ひこれを企てるに至ることがあつたか否かについては、全然庶孽のみが團結してこれを組織的に企てた例は、今のところ私の貧弱な資料のみを以て俄かに斷言することはできない。たゞ前にも掲げた光海朝に起つて、後世「七庶之獄」と呼ばれる朴應犀等の獄事が、或は最もこれに近いものではないかと思はれる。即ち光海癸丑（同王五年西曆一六一三）の春、「朴應犀、徐羊甲、沈友英、李耕俊、朴致仁、致義、結爲死生之友、同居於昭陽江上、號其堂曰無倫、詩酒自誤、或稱江邊七友、或稱竹林七賢、結黨爲盜、殺京商（一作東萊銀商）于烏嶺、被捉於捕廳」⁽¹²⁾の事實がそれで、彼等一味が捕はれた直接の理由は如何にも強盜を働いた爲めであつて、同年四月二十五日の捕廳の啓にも、「去三月間、烏嶺途中、刼奪銀子數百兩、又殺商人、賊魁庶孽朴應犀」⁽¹³⁾とあるが、然し彼等が單なる強盜でなかつたことは、「初應犀等、狹文藝、習兵書、往來交遊許筠李再榮李士浩之類、戊申春、羊甲友英耕俊與金平孫等、連名上書、冀通仕路、不見許、怏々而歸、作窟驪江、爲同產一室之計、至是殺銀商、被捉」⁽¹⁴⁾の記事や、捕廳に於ける應犀の承服疏文なるものに、「羊甲以爲蓋世驍雄、首倡逆謀」⁽¹⁵⁾とか、また「其後、羊甲友英弘仁柳孝先等、同居驪江、日議兇謀、曰吾輩以卓榮之才、禁錮於當代之法、不

得伸其志、男兒不死則已、死則舉大名耳、遂交結壯士豪傑、……恨無金銀、辛亥秋、羊甲作鹽商於海州地、殺人逃來、往來嶺南、今春、羊甲等打殺銀商、得銀六七百兩⁽¹⁴⁾などの事實や、それから等⁽¹⁵⁾の金銀を以て或は軍資にし或は宮中の賄賂に使用すべき路を一々告白したと稱するところなどから察することができるようである。然しこれには別に異説もあつて、彼等がどれほど組織的に實際に叛亂を企てたかは疑はしい點がある。彼等が驪江に一室を建て、同居したことも、又強盜をしてまで銀糧を蓄へたことも、別に他意がある譯ではなく、詩酒自ら娛む爲めにすぎなかつたとも云はれ、又或は應犀の承服文も彼れが捕廳に捕はれた時「欲直招、捕將韓希吉鄭沆、故緩鞫問、引誘應犀曰、爾若如此如此、不但免死而已、大功可成、爾須深思更招、應犀欣然更招曰、我等非是竊盜、將舉大事、欲備糧械、潛通國舅金悌男、欲擁永昌大君爲主、沆等⁽¹⁶⁾ハ啓」などの説があつて、彼等の陰謀の實際がどの程度であつたかは確かめることができない。事實、永昌大君と金悌男とがこれに直接關係したとは無實のことで、李爾瞻及びその徒黨鄭沆などの爲めに謀殺されたと云はれてゐる。然し又朴應犀の告白が全く鄭沆の誘引による純然たる虚構のみであるとも思はれない節があつて、日月錄によれば「世傳、此獄非特出於沆輩、羊甲等實狹不群之才、常謂、宣廟大君、只有義最爲聖睿所加、光海政事紊亂、當與圖事⁽¹⁷⁾」とあつて、沆及び悌男に對する誣告の問題を別にして、彼等庶孽の間に既に差別的待遇に對する不平が蓄積し、又それ相當の計劃策動をした事實のあつたことも見逃せないようである。

も見逃せないようである。

此様に庶孽の集團的陰謀といふやうな運動は、史上それ程多くの例も見えず、又實狀から考へてもそれほど多くある筈もないが、一人或は數人の庶孽が、或は陰謀に加擔し、又はその爲めに劃策したことは屢々みられるのであつて、これが此方面に於ける最も多い例ではないかと思はれる。その著しい例を一つ擧げてみれば、肅宗庚申（同王六年、西曆一六八〇）に於ける許堅之獄がそれであつて、當時領相であつた許積の庶子堅が麟坪大君（仁祖の第三子）の子福昌君楨、福善君楹、福平君種等と通じて陰かに不軌を計つた事實である。これは當時兵曹判書の職にあつた金錫冑の摘發によるものであるが、傳へられるところによると「麟坪之子諸福素驕傑、今上初年、數違豫、諸福陰蓄不逞、窺覲非望、是時西人當路、恐難售計、遂投合諸南、以尹鑑許穆爲師、欲爲排擯西人之計、……許積爲首相、諸福乃潛見積妾子堅曰、今上如有不幸、汝使我爲嗣、我當兵判汝矣、堅大喜、遂祭天爲盟⁽¹⁸⁾」とあるのみならず、彼等の罪を裁斷した後で肅宗が、「傳曰罪人楨、往來逆堅家、如有上疏之事、必借堅手、昏夜往來、且與相議禮文是非、反庶孽通濟之事、堅與鄭元老姜萬鐵、言語之間、以爲主上、久無儲位、若有不幸、彼人輩必爲之、所謂彼人、指渠兄第云⁽¹⁹⁾」とあつて、如何に許堅がその現在⁽²⁰⁾の地位に不平であり、又その野望を満足させるために策動したかを察することができるのである。此等麟坪大君の諸子福は、寵を恃んで驕淫、顯宗の時より常に宮掖に出入し、又南人と交結してゐるのみ

ならず、肅宗の初年に宮女を奸する事件に坐して配竄され、後に許された前科のあるものであり、許堅は「幸父之無嫡、乘父之老耄、藉父之權力、驕邪淫縱之行、姦騙欺枉之事、國言之所騰籍、閭里之所共憤……其他作奸、有難悉數、至於狎驢名流、締結驍獍、其爲情節、萬々無狀」⁽¹⁰⁾と云はれたものであるが、彼等が一は宗室の近親であり一は庶孽の身分でありながら、互にその野心を實現する爲めに親密に交結した所に、我等の興味を引くものがあるのである。而かも興味は單にそれに止まらず、庶孽が黨争の渦中に加つて、有力な活動をしてゐる點も注目を要するのであつて、許積、尹鐫、許穆は南人の領袖であり、諸福がその陰謀の實行に便宜であるとして平素より南人と交結したことも、上に掲げた引文によつて明らかな通りである。そしてこれを摘發した金錫冑は此反對派西人の領袖であつて、此變の爲めに禍は南人全體に及び、許積尹鐫には死を賜はり、その他のものも多く竄謫せられて、西人金壽恒が領袖となつた。そして此時閔鼎重、金錫冑が摘發に利用した上變人鄭元老なるものが又實に鄭芝衍の庶子であるが、彼は此功によつて南部參奉を除授されてゐるのである。

庶子の陰謀に加擔したものは此他にも多いが、一つの例をあげて見れば、仁祖甲子（同王二年西曆一六二四）に北兵使李适の不平から内亂が勃發し、王が一時難を避けて公州に趨らなければならぬほどの事變があつたが、之れに與つて謀計をめぐらした尹仁發なるものは、承旨尹敬立の妻子であつた。「仁發、乃故承旨敬立妾子、與适子旃陰謀、約爲内應、及爲李佑等所告、詐死入寧邊」⁽¹¹⁾と

日月錄に記されてあり、默齋日記には「初尹義立之孽侄仁發等、托以科業、居接聚會於仁城君家近地、與适相通」⁽¹²⁾とも云ひ、荷潭錄には「龍榮曰、尹仁發詐死、而潛投李适、爲策士」⁽¹³⁾などであつて、何れも彼れが相當此陰謀の樞機に參してゐたことを語つてゐる。适等の叛軍が京城に入つて、都民に諭してその本業を守るべきことを勧め、官員を配置して朝廷の威容を成した時、「失勢之人、無賴之徒、陸續投入者、不記其數」⁽¹⁴⁾と傳へられてゐるところを見ると、此叛亂は當時の社會に、可なり大きな波紋を描いたものと思はれる。

又壬辰の亂及びその直後には、各地に叛亂と盜賊が蜂起したが、その内には賤孽が主動となつたものも少くない。その一つの例としては宣祖丙申（同王二十九年、西曆一五九六）七月鴻山に起つた李夢鶴なるものの亂であるが、紫海筆談の記す處によれば、「李夢鶴京口賤孽也、落拓無行、爲其父所黜、往來兩湖間、韓絢之爲先鋒將也、隸其軍、與絢作亂、夢鶴先起兵于鴻山、虜其倅尹英賢、又虜林川倅朴振國、人心瓦解、連陷六七邑」⁽¹⁵⁾と云はれ、その計劃が相當有力な反響を起したことは、「夢鶴性本兇狡、初爲編裨、見國事難危、與韓玄等、潛謀不軌、嘯聚無賴、是時、人民困於亂離侵漁之酷、從者靡然、不數日兵至數萬、……時賊兵所過、耕田者持鋤、行商者持杖、奔走樂從」と記されてゐる事によつても察せられる。

庶孽の策動する手段としては上に記したものの他に、所謂變を告げて功を窺ふ事がある。これは庶孽のみならず、一般の多くの狡猾な野心家がよくとる手段であるが、他の方法によつて榮爵をうる事が到底不可能な庶孽にとつては、これは榮達の方法として或は最善の途の一つであつたと云はれるかも知れぬ。従つてこれによつて高位勳録をえたものも、史上にはその例が少くないのである。朴淳が己れに背いた鄭介清を評して、「介清本微賤、若不乘時附勢、難以立身、何足怪乎」と云つたのは、蓋し此種の心理を最もよく洞察したものといふことができる。

此様に變を告げて功臣に録されたものとしては、中宗丁卯（二年、西曆一五〇七）に於ける李顥の陰謀を告げた盧永孫なるものがその一例である。それは「丁卯九月、庶孽盧永孫、告李顥等逆謀、顥等伏誅、盧永孫參勳、封光原君」の事實であるが、此時は彼のみならず「錄定難臣盧永孫等十二人」した。これは後日彼れの奸計を憎む臺諫の啓によつてその功録を削されてしまつたが、兎に角當初は此のような殊遇を受けた。又庶孽柳子光が後日あれ程の權勢を伸ばすに到る出世の緒口も、やはり「睿宗初、告南怡反、錄功、封武靈君、躡取一品階」であつたとは、南袞の柳子光傳に見えるのである。此様に君に封ぜられ功臣に録されないまでも、これによつて一躍高位榮爵に登つたものも多く、その最も著名な事實を一つ例にとつて見ても、宋翼弼の父祀連がその見安處謙の時局悲憤の言を捉へて、妻の兄である庶孽鄭鑑と共に密告して賞をえたことなどがあるのである。此事が當時

の社會及び後世に甚だ大きな衝動を與へたことは有名であるが、祀連は李肯綯の記す所によれば、

「初安瑋之父、司藝敦厚、年老喪耦、以兄監司寬厚之婢重今爲妾、重今有女、曰甘丁、乃家蕃前所生也、宋翼弼森錫以甘丁爲敦厚之女、而時人喚安瑋子孫、誣謂非敦厚之女性狡黠、年十四五歲、爲不道之語、敦厚怒其有離間之漸、大杖足

掌、折傷數指、送于白川外家、敦厚歿後、甘丁嫁白川宋璘、璘一錄曰甲士者斤金之子生子祀連、安氏一家之人、

視祀連如親子弟、出入信幸、至是上變、遂成辛巳之禍」⁽¹³⁾とあつて、彼れは普通の單なる庶孽ではなく、婢妾の産んだ女の子と生れた賤孽身分のものとされてゐた。彼れは此時の告變之功によつて、

「祀連賞加折衝受錄終身鎧軍職四品、各賜被罪人田宅奴婢」した。

ところが茲に注意すべきことは、此様な變事を上告する手段は野心ある庶孽の策動する有力な方法の一つではあるが、之れを企てた凡てのものが必ずしも初めよりその報酬のみを期待し、勳功を唯一の目的としてゐたと斷言することはできない。否、却つて口頃の虐待賤視に對する報復として、所謂機を見て毒を擅にせんとする場合も少くなかつたのである。

先づ前に述べた柳子光が何故に戊午の史禍を引起したかについては、彼れの金宗直に對する些細なる私憾を極めて重大に見る人が多い。即ち子光が宣城府院君盧思愼、坡平府院君尹弼商などと共に、金宗直の「弔義帝文」を指して世祖を譏刺したものと上啓した所以は、「子光嘗遊咸陽郡、作詩

屬郡宰、鏤板而懸諸壁、及宗直守是邑、撤而焚之、曰何物子光、乃敢爾耶、子光悲恨切齒^(四)とも、又「子光……仍啓曰宗直詆毀我世祖、宜論以大逆不道、其所爲文、不宜流傳、並皆燒毀、主從之、凡藏宗直詩文者、令於二日內、各自首來納、焚於賓廳前庭、其又諸道館舍留題懸板、令所在撤毀、成宗嘗命宗直、撰環翠亭記、掛在楣間、並請撤之、所以報咸陽之怨」^(五)とも傳へられてゐる。又所謂乙巳士禍の主動者南、衰は庶孽ではないが、彼がこれを引起すに至つた重なる原因が、やはり日頃の賤視に對する私怨を報いんとするものであつたと傳へられてゐる心境は、甚だ庶孽の世人の賤視蔑遇に對すると同じものがある。彼れは平常自ら名節の士を以て任じて居り、常に士林の間に伍せんことを希うてゐたが、趙光祖一派の學士等は彼を目して小人となし、遇へば必ず詆誣する風があつた。彼れは心中大いに彼等を怨み密かに報復の機のを待つてゐたといはれてゐる。此事については楓巖輯語にも「初南衰雖以名節自好、然士類皆先見其不是處、至目之以小人、見輒詆誣、露於言色、衰盡其情禮而順之、金淨未釋褐、有詩名、操節特秀、衰爲直學、相遇友人家、淨方醉臥、見衰至、不爲禮、主人蹙之、使起、乃始逢髮瞋目、視衰、曰何物小子、來醒我夢、衰待之甚恭、曰聞措大名、常如卷中人、乃幸得拜於今日、某新得輞川圖障子、願得佳篇、遂命蒼頭、取於家、以進、淨醉墨揮洒、亦不沉思而就、衰再三諷咏稱善、然心常快々」^(六)と書かれてある。又此乙巳士禍の一因として傳へられるものに、趙光祖が大司憲となつた後、或日途中で賛成高荆山なるものに會つたが、

その時光祖は禮をせずに過ぎ去つた。これを光祖の反對派が聞いて、何れも切齒してその無禮を憤つたと傳へられる。此様な個人的怨恨が重疊して、光祖一派の身邊には嫉憎怨視が集まり、遂にその爆發するところ慘憺たる士禍となつたと傳へられてゐる。又此乙巳士禍に於いて林百齡が尹元衡と力を合はして尹任の徒を排擠したのも、「公（尹任）與林百齡同在一閑、嘗爭娼妓玉梅香^{平壤妓、有國色}、百齡妬媚、中公以逆謀、乙巳禍、端在此、誅公之後、妻妾奴婢、分賜功臣、百齡求玉梅香爲婢、終售其計」^(七)とあつて、一人の妓妾を圍つての個人的嫉視が重大な原因の一つだと云はれ、「百齡與元衡、自十年前相往來、日夜密議、至是發焉、安世遇、申秀經、尹敦仁、崔彥浩、萬年、鄭碩、姦細賤劣、人視之如腐雞、皆乘時自恣、以誣陷士類、殺戮報復爲事、人皆測目而已」^(八)とも云つてゐる。此士禍は黨争に於ける所謂大尹小尹の争ひであるが、これら小尹派の中の尹敦仁なるものは、矢張り庶孽身分のもので、此時の功を以て除職録勳されたのである。

此等の例よりもつと辛辣なものとしては、宣祖己丑（二十二年、西曆一五八九）に於ける所謂鄭汝立の獄事に當つて、逆謀に與つたといふ理由を以つて殺された、白惟讓の例がある。「初白仁傑、自乙巳禍作、久杜罪癢中、有女、無與爲婚、問其姪惟讓曰、吾欲以義寧爲婿、惟讓曰、義寧宗室賤孽也、其母及叔母、皆着手靶、市井之女、願勿婚、仁傑不聽、竟以爲婿、既婚、其妻以惟讓言告義寧、義寧由此與惟讓有隙、生子春英、追啣宿憾、視惟讓父子如仇讐、及獄起、與其舅白惟成、做出無根

之説、云々」がそれで、彼等の怨恨が如何に深かつたか、又その結果が當に惟讓一身の損滅のみを以つて満足しなかつたことは、「惟讓死後、子振民興民、在樞密侍幕、鄧澈與白惟威李春英、使內官李夢鼎密啓曰、言三峯去處外、議以爲白振民兄弟詳知、庚寅七月十二日並堂來、供曰、父所不知、云々、在獄中製疏欲自明、既受重杖、不能自書、竟未果、九月十二日、殞於杖下、興民亦杖死」の記録を見ても、又一「白惟讓四父子、皆死於杖、隣里知舊、畏莫敢問、有庶孽、來治其喪、惟威往見其治喪出於至誠、怪而問之、對曰、余是家門孽屬某也、……惟威囑雲翼、以逆賊治喪、杖殺」の文を見ても推察することが出来る。即ち彼等は賤孽であるとして蔑視された怨恨の爲めに、その一家子弟に至るまで、之れを杖殺しなければ承知しなかつたと傳へられてゐるのである。それにしても、惟讓は賤孽を蔑視して齒せざる事あれほど甚しく、たとひそれが宗室の孽子にしても、從妹の夫たる資格なしと頑強に主張してゐながら、そして又その爲めに一家殲滅の悲運にまで會ひながら、親戚故舊が畏れて近付かぬ自分の遺骨を、その孽子によつて至誠を以つて拾喪されようとは、皮肉なる運命の惡戯と云はなければならぬ。

此己丑の獄なるものは上掲の事實ばかりではなく、尙ほ一面には「初汝立背叛李珣、阿附時論、反役之狀、西人常懷痛憤、今爲逆賊、西人無不雀躍相賀」の真相も、その中に織り込まれてゐたのであつて、此所謂西人の中には前掲宋翼弼の兄弟も含まれてゐる。「時宋翰弼、往黃海道、變姓名、

自稱趙生員、日夜怨東人、痛入骨髓」と云ひ、掛一錄には「成格、李春英、宋翼弼、翰弼、澈之腹心也」とあつて、此等庶孽が或は私感を逞せんとし或は野望を逞せんとして、當時の黨争の渦中に活躍してゐる狀況を窺ふ事が出来るのである。

ところが此告變の手段といふものは、一度これに成功したものとつては屢々同じ誘惑にかゝるものと見え、前記「辛巳之變」の時に祀連と共に謀して上變し賞職に與つた庶孽鄭瑞は、その後、明宗己酉（一五四九）に他の罪によつて囚はれた時にも、その罪を免れんとして又復變を告げ、獄中より人を誣告した事があつて、東閣雜記によれば「政院、以瑞自己免罪之事、搆誣大事、而來告、欺罔君上、動搖臺諫、請罪之、移禁府推鞠、全家流慶源」と記されてゐる。又仁祖戊辰（六年、西曆一六二八）には南原居業武宋光裕なるものが、尹雲衢以下多數の人を相手に變を告げた事がある。これは誣告なる事明白で、府啓、宋光裕本以悖逆之資、濟以凶狡之謀、平生心跡、有同鬼蜮、當初上變之時、所引之人、率多搆怨之類、聖明既已洞燭、幾盡蕩滌、則罪在誣告、合置反坐之律」と記されてゐる。此宋光裕は前の宋祀連の孫に當るもので、彼等一家が代を繼いで屢々同じ手段に耽けることも、我々の注目を惹くものがある。李貴は此時猶して「臣之所尤痛者、光裕之祖祀連、本以己卯賢相安靖家人、上變、安家父子、慘遭刑戮、至今爲士林至痛、豈知惡人之種、復出於今日、

欲逞其虺蜴之性者乎、安處謙之妄言、頗涉犯上、祀連之告、亦非全然誣罔、而當時以爲至冤、後世至於伸理、況此光裕之所告、株連許多士林、非特一安瑭之家、而其所爲說者、亦皆構虛捏無、以惑聖聽、比諸其祖之惡、抑有甚焉⁽¹⁴⁾と云つてゐる。此他にも庶孽が告變の手段を以つて策動した例はさだあるが、その一々を茲に述べ盡すわけには行かぬ。上掲數例によつてその一端を窺ひうれば即ち足りるのである。

以上述べた所を綜合して見れば、庶孽が法令的に禁錮され社會的に壓迫賤視されたにも拘はらず否、そのためにこそ、社會上政治上に可なり大きな波動を起すやうな行動をしてゐる事がわかるのである。従つて李朝時代を通じて、最も大きな政治的社會的の事件であつた「黨争」に於ける彼等の活動も、當然見逃がしてはならぬものの一つであらう。即ち上に既に述べた例のみによつてこれを見て、燕山朝の戊午史禍に於ける柳子光、己卯士禍の餘禍である辛巳安處謙之獄に關聯する宋祀連鄭瑄、又これに伴ふ宋翼弼翰兄弟、白惟讓を中心とする東西分黨の先驅運動と翼弼兄弟との關係、己丑鄭汝立之獄事に於ける鄭澈李春英白惟讓の關係、光海君五年の朴應犀の獄中上變による南北の抗争、⁽¹⁵⁾肅宗初年の南人西人の勢力交替に於ける許堅、鄭元老の活動など、何れも庶孽がその重要な役割を演じてゐるのである。

從來この「黨争」の原因については種々の説があつて、朴齋炯はその著「朝鮮政鑑」に於いて「書院」の弊害を以て「此本邦黨派之始也」⁽¹⁶⁾と云つてゐるが、此説の當らないことは既に幣原博士も論駁してゐるところである。又李建昌は「其故有八、道學太重一也、名義太嚴二也、文詞太繁三也、刑獄太密四也、臺閣太峻五也、官職太清六也、閥閥太盛七也、昇平太久八也」⁽¹⁷⁾と云つてゐるが、それは餘りにも概念的の表現に偏して問題の焦點にふれることができぬ憾みがあり、殊にそのうちには原因といふよりは却つてその結果とみるべきものが多いように思はれる。幣原博士はそれを「東西分争の眼目は新派の舊派に代らんとする際の感情の衝突であつて、區々たる人身攻撃によつて起つて末流の波を擧げた私事にすぎない」⁽¹⁸⁾といつてゐるが、これに對しては河合博士の所謂新舊兩派なるものに對する認識追求の不充分を補足せんとする試論がある。河合博士は「撫松小説」を引いて東西の分争が沈義謙金孝元兩人の私憾のみを以て説明すべからざることを説き、宣祖朝安瑭一家内に於ける良賤訴訟の重視すべきことを力説してゐる。⁽¹⁹⁾此様に東西分黨の時代的背景として、安家内部の良賤問題を重視することは當然必要であり又卓見でもあるが、問題を此處まで追求するならば、更に考究すべき根源が未だ殘されてゐるであらう。然しそれらのことは今は暫く問はず、茲では本論に必要な程度内で此安家内部の事件に關する問題の進展を一瞥しておこう。此事件は、前に燃藜室記述に見える己卯黨籍補、黃覓記事、掛一錄などによる一文を掲げたことによつて知られる通り、

全く宋祀連、鄭瑞等の庶孽出身の策動によつて辛巳之獄事を慝起したのであるが、此辛巳之獄の反動が中宗十六年辛巳（西曆一五二二）を去る六十五年後宣祖十九年丙戌（一五八六）になつて又復現はれたのである。それは同年三月十日安瑋の遺族である安瑠の妻尹氏等十一人安應選等十七人が、宋祀連の子翼弼一家に對して訴訟を提起し、宋一家は安瑠の曾祖父安敦厚に私通した甘丁の一族であり、甘丁の母重今はもと安家の婢であるから、その子孫は當然安家の所有奴婢であると主張したのである。これは龜峰集にもあるように、大典によつてみても當然問題とはならぬのであつて、六十年を経過すれば良賤の訴訟はこれを時効として免除する規定であるのに、これは既に六十五年の時日を経過して居り、加ふるに甘丁は既に贖良して良人となつて居るべきものでなければならず、その子祀連は中宗十四年己卯に陰陽科出身判官にまで任ぜられてゐるのである。此一見明らかな無實の獄事が容易に成立したことについては、翼弼兄弟が當時の東西分争の犠牲になつたのであるとするものが多い。即ち龜峰集に見える行狀と疏文などによれば「甲申、李栗谷既沒、黨禍益深、東人之仇疾牛栗兩賢者、移老於先生、丙戌歲、禍遂作、乃與兄弟、藏蹤避仇」⁽¹³²⁾、「李潑自惟讓輩、仇疾瑀瑋延及翼弼、必欲置之死地而後已、可謂怒甲移乙之甚者也、翼弼之父祀連、乃故相安瑋孽妹之子也、祀連之母、既已從良、祀連至於雜科出身、則連二代良役、且過六十年大限者、不得還賤、詔在法典、而潑等以祀連上變、爲安家子孫不共天之讎、故乘機指喉、蔑法還賤」⁽¹³³⁾と云つてゐるのである。茲

にも見えるように翼弼のために辯ずる人は彼等兄弟は黨争そのものには別に關係はないと主張してゐるが、「至東西黨起、龜峯右西非東、而又斥李山海、自惟讓之奸」⁽¹³⁴⁾、「潑吉、惟讓、又憎其兄弟、云々」の記録や、「宋翼弼兄弟、以文章自高、駕御一世、爲西人入幕之賓、奸論邪議、皆出其口」等の關係を察すれば、彼等が全く黨争に超然としてゐたとは思はれない。此安氏の子孫を指喉して翼弼兄弟を賤に返へす運動をした李山海、李潑、自惟讓などは何れも東人であるが、宣祖二十二年東人鄭汝立の己丑之獄を治めたものは西人鄭澈であつて、鄭澈は翼弼兄弟と親友であり、又その謀計に與つて努めた澈の腹心李春英が、その父義寧君を賤孽として蔑視した自惟讓に大いに含むところがあつたとも前にのべた通りである。此のように見てくると、「黨争」の根幹をなす東西分黨に、沈義謙、金孝元の影響を過大視すべからずとする主張が全く正しいものならば尙ほ更、たとひその説に幾分の眞理があるとしても、東西分争の主力であつた李山海、李潑、自惟讓、柳成龍、金誠一等（東人）と鄭澈、李瑀、成瑋、等（西人）の間に介在する此等庶孽又は庶孽關係のものの行動は、争黨そのものに可なり重大な影響を有するものとみななければならぬ。殊にその抗争の主な原因が彼等の身分問題にあり、又それを中軸としての紛争であつたとすれば、「黨争」の起因に對する彼等の關係は甚だ重大なものといはなければならぬ。此様な見地からするならば、黨争の原因が個人的感情の衝突人身の攻撃にあるとする説は、最も此種の原因を作り易き庶孽の充實した實力と尖鋭な行

動の方面を重視したものと云ふべく、又東西の分争の主因が良賤問題を中心とする抗争格闘であるとする主張は、此等庶孽出身者の血統の由來と不安な境遇の方面を指摘したものとしてみることが出来る。⁽¹⁵⁾ 何れにしても、「急すれば即ち士禍となり久ければ即ち黨論となる」⁽¹⁶⁾ といはれる朝鮮の政争は、禁錮法下に苦闘する庶孽の陰影を見逃がして充分に理解することは出来ないのである。

以上述べ來つた所は禁錮法下に於ける庶孽の策動する手段を、平面的に抽出して羅列したものである。然しこれのみ以てしては、その全般を窺ふことの出来ない怨みがあらう。茲に本稿を終るに先立つて、此等種々なる運動の結果、或は又それらの努力策動に伴つて、如何なる變化が起り、又社會の之れに對する輿論が如何に進展したかを、簡單ながら一瞥しておく必要があらうと思ふ。

先づこれに對する輿論の方面より見るならば、中宗朝に早くも趙光祖が朝廷に建白して「本朝人物、少於中國、而又有分別嫡庶之法、夫人民願忠之心、豈有間於嫡庶、而用舍偏隘、臣竊痛惜、請於庶孽中、擇才而用之」⁽¹⁷⁾と云ひ、たゞ庶孽の「貴顯之後、或有亂分之罪、嚴立科律」すればよいと注意してゐる。その後宣祖の時に申漬等千六百人が上章籲冤したことは前に述べた通りであり、李珣の通用之議を建てたことも屢々述べ盡したところである。此他にも同時代には成渾、趙憲など何れも通融清要すべきことを請うて居り、仁祖の時に至れば玉堂長官崔鳴吉がその官僚沈之源、金南

重、李省身、李景容などと共に、王旨に應じて章を聯ねて庶孽の通用を乞うたことがある。又鄭谷張維もこれを上疏力説した。仁祖がこれに對する議を集めた時、吏曹判書金尙容は「天之生才無間、嫡庶禁錮之法、所未有於古今也」と同啓し、玉堂がこれを公議に徵すべきもの故大臣に議せしむべしと請うたので王はこれを備局に下した。そこで李元翼、尹昉等は之を議して「卑薄庶孽、天下萬古所無之法」と云ひ、又吳允謙は「禁錮庶孽、古今天下未有之法、朝廷用賢收才而已矣、貴顯之後、名分紊亂、則邦憲固嚴、非可慮也」と云つたが、戸曹判書沈悅、順興君金慶徵、工曹判書鄭立、判決事沈諤、同知鄭斗源、護軍權帖等が異論を立て、都承旨鄭蘊又疏を陳べて反對を唱へたので遂に實行されなかつた。然し此等上述の禁錮反對論者の運動が全然無効に終らなかつたことは、文獻備考にある仁祖の時(三年)の「上命大臣二品以上于賓廳、議庶孽許通事、令廟堂酌定、備邊司啓曰……良出至孫、賤出至曾孫、並許通、庶幾得中、今後隨才授職、俾無虛老之歎、宜也、從之」⁽¹⁸⁾と「因大臣李元翼議、定許通事目、良妾至孫、賤妾至曾孫、乃許赴文武科」⁽¹⁹⁾などや、明宗の時の「二十一年、特許良妾孫以下、赴文武科」の記録などによつても推察ができる。此後宋時烈も疏に擬して、鄭道傳でさへ猶ほ大提學になつた位であつて(鄭の身分については前に述べたが)防限之法は中世に初まつたものであるから、一切疏通すべきものであるといふ一文を草したが、疏を果さなかつたと傳へられてゐる。又肅宗の時朴世采は「庶孽之中、雖有奇才異等、無以進用、請大加通變、

願 上勿滯於俗流、勿拘於常規、自見其必然之理、斷以行之」⁽¹⁰⁾へと啓して居り、知事金壽弘が矢張り許通を上疏したがその効なく、禮曹判書李表が「王者、受命四境之内、莫非王臣、又何可論貴賤於卑匹之中、門地闊閥、簪纓之謂也、簪纓之權、在於誰手、而有此遺本舉末之政乎、大哉我 宣祖大王之教曰、葵藿向日、不擇傍枝、人心願忠、豈必正嫡、今以庶孽可稱者言、殷有三仁、庶居其二、……或諉以 祖宗舊制、二百年永鋼者、至 宣廟朝、而許通矣、又至 仁祖朝、而許三曹矣、此亦可非耶、易曰窮則變、變則通、窮則極矣、此正變通之時也」⁽¹¹⁾と上疏したが、都承旨金徽がこれを却けてしまつた事實がある。その後同じく肅宗朝(二十二年)に明谷崔錫鼎が吏曹判書になつたとき疏を上げて、「庶孽防塞、本非古制、創自本朝中葉以前、右代言徐選倡之、贊成姜希孟繼之、而百餘年禁鋼成俗、宣廟朝、先正臣李珥、始發納米許通之論、自是許赴文武科、而清要諸職、格而不許、仁祖朝、因臣祖父鳴吉、筭進定爲事目、登科後許要、而不許清、臣祖秉銓後、因事目三數人注擬三曹郎官、爾後不行、今又過六十年矣、中國及前朝所無之法、我朝獨行之、如宋翼弼之學術、爲世大儒、而終於布衣、近世辛喜季之文章、禹殷錫柳時春之才諳、俱局於末官下邑而止、可勝惜哉」⁽¹²⁾と述べたが、右議政尹趾善が「吏曹判書崔錫鼎割中、庶孽許三曹一款、此非錫鼎初始之言、乃錫鼎祖父之所曾奏達、而行之者、其時先輩之論、或以爲宜、或以爲不便、論議之不一、古今何異、庶孽之不通仕路、乃我國之法、古今所無者也、先正臣李珥、始創許通之法、蓋爲庶孽通仕路之階梯、而適於其時、有北路軍兵事故、有此捧米之規、似非永以爲法之意也、此非金石之典、變通不難矣」⁽¹³⁾と反對して、遂に「上曰、許通之規、除去宜矣」の結果をみ、許通運動は茲に一先づその氣勢を挫かれ、次に來るべき大きな反動期の兆候をここに現はすに至つた。此間に於ける許通運動の狀況を總括して李滙は、「防限之法始於徐選、甚於姜希孟安瑋纂次大典之時、至 宣祖初年、申濡一千六百餘人、上章籲冤、批旨有葵藿傍枝之語、栗谷因邊憂、納粟許通之規、登科後例授奉常寺校書館三四窠而已、至 仁祖朝玉堂長官崔鳴吉以下、沈之源、金南重、李省身、李景容應旨論列、吏曹判書金尙容、回啓命議大限、時相臣時相李元翼、尹昉、吳允謙、收議、皆無異辭、方許要而不許清、要者即戶刑工三曹郎及各司官也、參判金壽弘、亦疏請、竟不行、至 肅宗乙亥、嶺南人南極井等九百八十八人、又上章籲冤、爲喉司所阻、明年丙子、吏曹判書崔錫鼎、疏論許要之後、不過三四人注擬、因以不行」⁽¹⁴⁾と云つてゐる。以て一斑を察することができよう。

庶孽の許通運動に對する反動とは、前にものべたやうに英祖二十一年(西曆一七四五)乾隆乙丑に「續大典」を頒布したときを以て、表面に具體化したものとすることができる。即ち「續大典」中の「庶孽許通納米赴舉之規、永爲革罷」⁽¹⁵⁾の條項がそれであるが、これはとりもなほさず宣祖以來緩和せられた「大典」の「勿許赴試」が、再び當初の姿に復歸せしめられたことになるのである。

即ち宣祖以來百五十年間の制度を一舉に全く革正してしまつたのであるが、前に掲げた榜目の抄録でも明らかであるように、許通を適法のものとして、顯宗丙午の式年生員進士試にも入榜の六パーセントに上る多數がこれによつて採擇せられ、又それが皆嫡流と同様に士人の子弟即ち「幼學」と名乗つてゐたことは、仁祖癸酉文科の金汝亮なり、戊子の曹燧なり、孝宗壬辰及第の尹槩殷、顯宗朝の李海準、肅宗朝の黃啓原など、榜目に妾子といふと同時に「幼學」と書かれたことなどでも知られるのである。加之、司馬榜目には安伯謙の父が庶孽であつて正しく「學生」と書かれてゐる位であるから、彼等自身が稱してゐたばかりでなく、朝廷の文書でも「幼學」として取扱つてゐたことが明白である。それ故に、庶孽は此百五十年の間にあつては、元より嫡流と全く同等の待遇は受けず、起舉に許通を要し、仕路の制限も解けなかつたが、然し昔日とは大いに違つて、大體に於いて「幼學」として泮宮にも入り科場にも出入する状態にあつて、表面は前代の虐待とは大いに趣を異にしてゐた觀があつた。それが此時に至つて、又復もとの禁錮一片の形式を備へる反動の時代を現出したのである。即ち「士夫妻子、冒稱幼學者、降定軍保」⁽¹⁰⁶⁾の法令を見るに至つたのである。

これには固よりいろいろの原因が考へられる。その最も根本的なものはいふまでもなく根強い階級思想所謂貴賤意識であらうが、その表面に現はれた原因の一つとしては、許通されない庶孽の冒科するものが多く、これに對する反感と又その處置と豫防に困窮した爲めであつたと思はれる。即

ち孝宗二年(一六五一)には、「備局啓曰、庶孽許通後、方許赴科、乃是法例、先朝申飭、亦非一二、而紀綱解弛、人不畏法、庶孽之未許通者、偃然赴試、該掌之官、亦不致察、隳然錄名、以致人々玩法、國試混淆、事極寒心、此後未許通冒赴舉者、勿論文武、依律科斷、知情許赴之錄名官及武科保舉人、並論以科場用情之律、今者大科在前、外方舉子雲集、此意掛榜、知委各別、嚴飭何如、答曰依啓」⁽¹⁰⁷⁾とあるが、如何にも當時の状況を窺ふに足るものがあり、當局のこれに對する策の窮してゐたことが分かるのである。そして又孝宗九年(一六五八)には「備局啓、請申嚴庶孽許通法、冒赴而現露者、直定軍役、循情而許錄者、論以重律、從之」⁽¹⁰⁸⁾とあつて、此時期に何れほど庶孽の冒科が多かつたかを察することが出来る。そこで肅宗二十二年(一六九六)には右議政尹趾善が啓して、「先正臣李珥、始創許通之法、蓋爲庶孽通仕路之梯階、而適於其時、有北路軍兵事、故有此捧米之規、似非永以爲法之意也、此非金石之典、變通不難也」⁽¹⁰⁹⁾と云つて、許通の法の廢止すべきことを力説した。そこで王も「許通之規、除去宜矣」と返答したが、直ちに實行はされず、只翌二十三年(一六九七)庶孽許通後赴舉、必以許通錄名」⁽¹¹⁰⁾と戒めて、許通の資格獲得者と然らざるものとの區別を確然たらしめるべきことを説いてゐる。そして此様な經路を辿つて、英祖の時復古の大改革が政治上の諸般の施設に加へられるに及んで此問題にも一轉機を見せて、同二十一年(一七四五)出刊の「續大典」に、前掲「庶孽許通納米赴舉之規、永爲革罷」の明文と、「士夫妻子冒稱幼學者、降定軍

保」の條が不刊之典章として上つてしまつたのである。

然し實際から見れば、此續大典刊行の乙丑より十年以前の乙卯年（一七三五）を以て許通を打切り、實際に行つたことがなかつたのは、上の引用した榜目を調べてわかる通りである。此大典發布の年には、前にも引用した通り及第嚴周宅の處刑が行はれ、五年後の辛未年には禹漢景（己未及第）が門地卑微の廉で汰去せられてゐるのをみれば、これらの事實に刺戟されて、嚴守する必要を痛感するやうになつたことは疑ひもない事實であるやうに思はれる。然し此許通なるものは、本來の性質が特惠である故に、此後も三回ばかり英祖の朝に行はれたことが記録に残つてゐる。^(註)即ち英宗丙子庭試榜（三十二年、西曆一六五六）

乙科三人第二位

通德朴淩源 德尉 庶（至掌令）
丙甲父師侃

潘南人

同甲申 二月
初八日 忠良科榜（四十年、西曆一七六四）

乙科一人

幼學金章行 士文 庶 至主簿
丁巳 父智諱

安東人
公州居

同癸己庭試榜 九月
二十日（四十九年、西曆一七七三）

丙科十一人第六位

柳明均 德輝 庶（官至察訪）
丙寅 父煥經祖父礪曾諱

文化人

然し此丙第一の朴淩源は通德であるから、許通で既に發解になつてゐたのであつて、その大科を認められたのであらう。第二の金章行は忠良科なるものが、安東金氏仙源清陰の子孫から甲乙丙各一人づゝを取る特試であつた關係から、金がその子孫として及第した譯であつて、例外として此抜ひを受けたものと思はれる。第三の柳明均に至つてはその理由が判明せぬのであるが、恐らく第一の朴の場合と同様な關係ではないかと思はれる。さうすれば此等三者の例と云へどもあながち違法とは云へない。^(註)然し此の様な許通も、これが最後であつて後は全くその跡を絶つてしまつた。

未通の庶孽の冒料が、此許通法廢止の一因であることはいふまでもないが、然しよく考へて見ればこれもそれだけでは、何處までも表面の一理由にすぎない。そこでその重大な一因として、英祖朝の諸般の施設に於ける復古運動を見逃がす譯に行かない。即ち許通法の廢止もその政治的復古運動の一つの現はれと見なければならぬのであるが、然し復古とは云つてもその運動の動機が只盲目的な復古でなかつたことは、當時の他の諸般の改革を見て容易に悟ることができるのである。此時の復古運動の真相を確めんとするならば、實にその深底に横はる當時の社會事相の前日と大いに

變化してきた點を見落してはならぬのであつて、社會階級の變動離合の事實がその一つであらう。今此れを簡単に述べてみるならば、第一に所謂「黨爭」といふ事實が英宗の即位と共に終結したことであつて、其後は老、少、南、北の各色目間に前日の如き軋轢がなくなつてしまつたことが我等の注意を引くのである。政治的にこれを見れば、英祖朝の末期から洪麟漢の專權が始まり、正宗即位と共に洪國榮の「勢道」になり、その後は幼主の繼承が続いて、戚臣を中心として「勢道政治」なるものが益々發達し、そのまゝ爾後百五十年間を續けられるやうになつたのである。それ故に英祖の中年は、政權の方面では黨論政治が勢道政治に移る劃期をなしてゐる。勿論これには多少の問題もあつて、此時黨爭がなくなつたとはいふものの、直ちに「色目」が消滅した譯ではなく、否、却つてそれは益々判然と分れてはゐたが、その各色目の關係と對立の状態が、昔日と大いにその趣きを異にするものがあつた。即ち此時期からは色目は家門に固定し、婚嫁は勿論、交遊までも隔絶した極端な排他的のものとなつたが、然しこれは何處までも私的關係又は家門に限られたものであつて、朝廷及び公席などに於いては相互極めて寛容であり、禮儀正しく互に推讓して、並んで朝にも立ち共に政機にも參與するやうになつた。故に此時以後の「四色」なるものは、兩班がその身分素性を表明するといふことのみに限られるもので、各自當面の主義行動には何等の影響も意味も有せぬことになつてゐる。即ち彼等が外部に對して四色の一つでなければ兩班ではないといふやう

な、兩班以外の階級に對してその傳統的の立場を明確にするより他、何等の意味を有せぬものとなつてしまつたのである。そして今若し此等の現象の根底を更に深く追究するならば、當時の經濟生活の變化による一般社會の階級變動にまで洞察を加へる必要があるに違ひない。四色兩班以外の地方兩班なり、その他經濟生活の變化によつて新に起つた地方農民、或はその他の生業を有する新興勢力の有閑階級から多數科擧に上つたものなどが、此等四色階級よりは一層下つた地位に於いてはあるが、嚴然たる一階級として擡頭し存立するやうになつてきた事實が、それである。前代に於いては、同一兩班階級として左程差別的には見られなかつた地方兩班も、永い間政權より離れ、ばその當然の結果として、任官に於いても社會的待遇に於いても、何時の間にか四色兩班とは別の定つた地位を占めなければならぬようになる。然し此地方兩班の經濟生活の富裕は、新興せる有産有閑の階級と共に、四色階級を威嚇するに充分なものがあつた。即ち從來黨爭を事とした四色兩班がその階級の内爭の精力をこれら新興階級に對する關係に轉向して、階級の貴賤を力説してその傳統を明白にせんと努めるに至つた所以であらう。此風潮が當時の復古的大改革の根本動機となり、又その一つの現はれとして庶孽の許通革廢となつたものと見るべきであると思はれる。庶孽の許通は從來の状態から考へるならば、なるほど國家社會のために効果のある便法には違ひなかつたが、此時機のやうな階級の差等を整立し確然たらしめんとする時風に會つてみれば、それは如何にも無秩序

な曖昧の憾みを免れず、而かも冒科冒稱などによつて混亂錯雜してゐた時態を目前にみては、許通の廢止は蓋し止むをえない結果であつたと思はれる。殊に庶孽は上に述べた分離しつゝある二つの兩班階級の何れの一方に包含されつくすものでもなく、又別に一つの階級を作るには兩者間の利害と上下の懸隔が餘りに甚しき素質を藏してゐた。庶孽はなるほど庶子禁錮の差別的待遇を痛憤したが、然しこれは何處までも兩班階級内部に於ける嫡流との間の係争であつて、彼等が一度兩班以外の階級に對するときは、何處までもその父祖の血統を誇りその階級の特權と社會的優位とを主張せんとするのである。即ち彼等の不平と又それを打開せんとする努力の目標が、その根本動機に於いて決して眞の一般的根本的の平等要求又は階級打破にあつたのではなかつた。否、眞相は寧ろその正反對でさへあつたと見られるのであつて、これは此問題を考へるときに我等の特に注意を要する點である。此事を念頭において考へるならば、當時の社會事情が兩班階級内部に階級分離の現象を生ずるに當つて、彼等がその風潮に合流して、階級の整列を主張し風教の振興を叫んでも敢へて奇怪とすることはできない。彼等は目前の小さな利害を固執顧慮する暇なく、その所屬する根幹の階級の利害に賛同するに至つたのである。加之、庶孽自體よりみれば、許通なものの實態が、眞に根本的の解放であるならばいざ知らず、それは實はその當事者個人の而かも一身に限るものであつて、その子孫の解放を意味するものでもなく許通されたものにも官位の制限はとれず依然清官は許され

ず、又その特許がその時々國王なり朝臣なりの任意氣儘に行はれるものであるため、幾年も特許を見ないこともあれば、一時に頻出することもあるやうな不定のものであつた點などから考へて、庶孽全體としては果してどれほどこれを特權と感じたであらうかも疑はしいところがないとはいへない。これらの事情が、此時の庶孽禁錮の復舊に對して左程著しい不平を惹起しなかつた原因であると思はれる。此續大典の法文が、驚くほど前代の解放的潮流に反動したものでありながら、爾後百五十年の間何等の變改も見ずに、近世まで續いてきたのは此爲めに外ならぬと思ふ。

然し此庶孽の許通なるもの自體が、既に屢々のべたやうに、たゞ一時的緩和の手段にすぎないものであつて、永遠の解決策ではもとよりなかつた。庶孽全體の根本的解放の問題は、時の流れと時勢の反動如何とに拘はらず、常に殘された大問題であつた。そしてその禁錮と解放の形勢の一進一退するうちに、その根底を流れる時代の趨勢が漸次緩和の狀態に進みつゝあつたことは見逃がすことができない。即ち四百年の間に、最初の貴賤差等の主張と習俗が、一般社會生活の變化と階級の錯雜によつて、漸次此勢ひを馴致したものとみななければならぬ。これは常に庶孽に關することだけでなく、又兩班と常民との間のみならず、民と奴婢との間にも同様の傾向がみえるのであつて、所謂階級水準化の一傾向一流波とみるべきものかも知れぬ。勿論此間には外亂の錯雜があり、それ

が此傾向を促進せしめたこともあらう。然し、何によりも見落してならぬことは、社會の經濟生活に起つた大きな變化である。物々交換から常平錢通用の時代に變り(孝宗二年—六年、西曆一六五一—一五)、貢法が「大同」(肅宗三年、西曆一六七七)になつて、地方には元山、三浪津、江景などの都會が新しくできた。地方の農民のみならず、凡ての生業の人に有閑階級の新興勢力が起り、これが遂に中央の爲政者をも動かすほどの勢力となつてきてゐる。「武科」の試場のみならず、「文科」の大小科及び司馬試に於いてさへ、年々京綰の三倍位の入格者を地方より出してゐる事實は、前代とは全く隔世の感があるといはなければならぬ。此様な狀勢が時代と共に漸次進展しつゝある中にあるので、庶孽禁錮のみが何處までもその舊習を固守することのできないことは明らかである。たとひ中途英祖朝の復古運動はあつても、これも此大きな時代の流れに比べれば、やがては消え去るべき一つの小さな反動の波にすぎなかつた。このやうにして、純祖四年(一八〇四)には「命庶流蔭武疏通」⁽⁵⁶⁾の結果がみられ、哲宗八年(一八五七)には左議政金道喜の啓によつて「庶類文科施槐院分館」⁽⁵⁷⁾と命ぜられた。そして李太王(熙)二年(一八六五)には「庶類疏通、更定節目、文官限從二品、許左右尹及戶刑工參議、通清、只許臺職、蔭官限牧使、初仕部都事、監使守奉官無碍、武臣限從二品、兵使如總管亞將、西北國訓練正副正及廟社陵殿官、桂坊教官勿許、各道抄薦才者一人、隨其閥閱、許槐院宣薦」⁽⁵⁸⁾となり、同王十九年(一八八二)諸般の施設に近代的改革更新を斷行するに際して、

(七月)「我國之尙門地、誠非天理之公也、國家用人、何限貴賤、今當更始之日、宜恢用人之路、凡西北松都庶孽醫譯胥吏軍伍、一體通用顯職、惟才是舉、如有奇才異能者、内而公卿百官、外而方伯守令、各舉所知、送赴銓曹、予將擇而用之」⁽⁵⁹⁾の敎書を見るに至り、初めて全く庶孽の禁錮は解かれるに至つた。

(庶孽禁錮法の註にある「限品叙用」の範圍内に於ける庶孽の活動は、甚だ興味ある問題であるが、茲では省略に従つて論及しなかつた。これは別の機會に述べる方が却つて便宜であらうと思つたからである。)

(註、一) 大典會通、卷二、禮典、諸科、朝鮮古書刊行會本、一一五頁

(二) 同上 卷一、吏典、限品叙用、六一頁

(三) 高麗史、卷七十三、志卷第二十七、選舉一、國書刊行會本第二冊、四九五頁

(四) 神官雜記、卷二、大東野乘所收、朝鮮古書刊行會本、第一冊、五三〇—一頁

(五) 增補文獻備考、卷一九二、選舉考十詮注二、二丁

(六) 燕巖叢集、卷三、補遺、擬請疏通疏、寫本、二十四丈以下

(七) 三峯集、卷四、行狀、朝鮮古書刊行會本、一〇二頁以下

（八）同上、卷十四、附錄、事實、三八四頁

（九）同上、三八六頁

（十）これには丹陽禹氏から出た説と車原類一門から出た説とがあり、それぞれの詳細は「禹玄寶家傳」及び「雪冤錄」にあるが、二説又一致せぬものがある。

（十一）燕巖續集、同上

（十二）李朝太宗實錄、卷二十九、四十七丁

（十三）同上、四十八丁

（十四）同上、卷二十七、五丁

（十五）同上、六丁

（十六）高麗史、八十五、志卷第三十九、刑法二、奴婢、第二冊、七一七頁、此「賤者隨母」については又別に論考する必要がある。

（十七）同上、七一六頁

（十八）國朝榜目、世祖戊子二月十五日出榜條に「甲科一人、兵正柳子光、子俊（至武靈府院君罪刑罰）父規、子煥庶弟、靈光八」とある。

（十九）星湖僊説、寫本

（二十）增補文獻備考、卷一九三、科擧十、詮注二、八丁

（二十一）瞻慕堂集、卷二、問王若曰云々、事大交隣、嫡庶、慶僧條、寫本二十六丁

（二十二）增補文獻備考、卷一九四、科擧十一、詮注三、二十一丁以下

（二十三）これは丹陽禹氏より出た説であるが、道傳の母禹氏は禹淵（榮州士族散員）の妻の所生であるが、此淵の妻は金猷の

娘である、その猷の妻といふのは金猷がその奴を殺して、その奴の妻を娶つたものであるといふ説。

（二十四）高麗史、一一九、列傳卷第三十二、鄭道傳、四八六頁、金震陽等上疏條、又同一一七、金震陽列傳、四五〇頁、參照

（二十五）燕巖續集、上掲

（二十六）南溪、柳子光傳、李肯翊、燃燈室記述、卷六、戊年史稿條所出、朝鮮光文會版本、七十二頁

（二十七）李蔚、陰曆日記、大東野乘所收、第 冊一〇〇頁

（二十八）燕巖續集、上掲

（二十九）大典會通、卷三、禮典、立後條

（三十）王の特許による特別の繼後の記録は、初の禮曹に保存され後總督府圖書館に藏されてゐる「繼後贈錄」（自高曆戊午至成豐辛亥）二十一冊（寫本）、「法外繼後贈錄」九冊（寫本）、「收養侍養贈錄」二冊（寫本）、「收養承嫡日記三冊」（寫本）、「繼後正記抄錄」一冊（寫本）等三十一冊であるが、未だ周見の機に接しない。然し此等は凡て高曆以後のものであつて亂前のもものは高曆の亂に亡失してしまつて俾はらない。李朝實錄によつて數個の例を摘出することができたが未だ全貌を窺ふに及ばぬ。

（三十一）大典會通、上掲、一四五頁

（三十二）燕巖續集、上掲

（三十三）稗官雜記、卷二、大東野乘所收、第一冊、五三〇—一頁

（三十四）燃燈室記述、卷十八、宣祖朝相臣、閔箕條所引、二七八頁

（三十五）稗官雜記、卷三、東國風俗條、前掲、五四二頁

（三十六）古今笑叢、寫本、前岡恭作氏所藏、不寒不熱二月天、一妻一妾正堪憐、云々の詩話

（三十七）漢、劉熙、釋名、卷二、親屬條

- (三十八) 成規, 儲齋叢話, 卷六, 大東野乘所收, 第一冊, 一四二—三頁
(三十九) 韓官雜記, 燃藜室記述亦引, 卷十一, 一一頁
(四十) 晦齋集, 燃藜室記述, 卷十一, 黨附尹元衡諸人條所引, 十七頁
(四十一) 聽天遺閑錄, 大東野乘所收, 第三冊, 三二—一頁
(四十二) 燕巖續集, 前揭
(四十三) 同上
(四十四) 註四十一に同じ
(四十五) 金塘, 海東名臣錄, 卷二, 朝鮮古書刊行會本, 八六頁
(四十六) 李德潤, 竹窓閑話, 大東野乘所收, 第十三冊, 三三五頁
(四十七) 註四十二に同じ
(四十八) 增補文獻備考, 卷一三三, 刑考、議獄條
(四十九) 同上, 卷一九四, 選舉十, 詮注二, 肅宗朝禮曹判書李袞上疏, 二十二丁
(五十) 註四に同じ
(五十一) 增補文獻備考, 卷一九四, 選舉考十一, 詮注三, 二十二丁以下
(五十二) 燕巖續集, 前掲, 三十三頁裏面
(五十三) 淳昌文官扈方辰所記, 燃藜室記述, 卷二十, 朴應岸之獄所引, 一頁
(五十四) 燃藜室記述, 卷十八, 宣祖朝相臣條, 二九頁
(五十五) 同上, 卷十一, 尹元衡之黜死條, 十二頁
(五十六) 同上
(五十七) 李星節, 日月錄, 禹性傳癸未記事, 燃藜室記述, 卷十三, 李與辛逆條所引, 二九頁

- (五十八) 同上, 二九—三〇頁
(五十九) 癸未記事, 同上所引, 三二頁
(六十) 許篈, 海東野言, 大東野乘所收, 第二冊, 一三二頁
(六十一) 燃藜室記述, 卷十三, 三三頁
(六十二) 大東野乘所收, 第三冊, 三二—一頁
(六十三) 禹性傳, 癸甲日錄, 燃藜室記述, 卷十三所引, 三三頁
(六十四) 李與行狀, 栗谷集, 及燃藜室記述, 同條亦引
(六十五) 李肇敏, 掛一錄, 燃藜室記述同上條所引, 三六頁
(六十六) 禹性傳, 時政錄, 日月錄, 同上, 五二頁
(六十七) 癸甲日錄, 同上, 卷十八, 宣祖朝備賢, 李與條, 八八頁
(六十八) 同上
(六十九) 聽天遺閑錄, 前掲, 三三二頁
(七十) 增補文獻備考, 卷一八七, 選舉考十, 詮注四, 一丁裏
(七十一) 金時讓, 清溪記問, 大東野乘所收, 第十三冊, 五二四頁
(七十二) 增補文獻備考, 卷一九四, 二十二丁裏
(七十三) 柳成龍, 懲惡錄, 燃藜室記述, 卷十五, 二十一頁所引
(七十四) 柳成龍, 西崖集, 同上, 二十五—六頁所引
(七十五) 燃藜室記述, 卷十七, 十六頁
(七十六) 增補文獻備考, 卷一九九, 選舉考十六, 勅用二, 六丁裏
(七十七) 同上, 卷一九四, 二十一丁

(七十八) 註七十六に同じ

(七十九) 增補文獻備考、卷一九一、選舉考八、科制八、武科條、三丁裏

(八十) 燃藜室記述、卷十七、亂中時事摠錄、八一頁

(八十一) 芝峯類說、同上、別集、卷十、四頁

(八十二) 註七十九に同じ

(八十三) 註八十一に同じ

(八十四) (八十五)(八十六)燃藜室記述、卷十七、亂中時事摠錄、八十頁

(八十七) 柳夢寅、於于野談、同上、別集、卷十、三頁

(八十八) 同上

(八十九) 芝峯類說、燃藜室記述、卷十七、八十五頁所引

(九十) 龜峰集、卷十、七丁以下(寫本)

(九十一) 同上、卷十、宋時烈撰、纂碣文、九丁裏

(九十二) 同上、李達所述、行狀、二丁

(九十三) 癸未紀事、燃藜室記述、卷十三、李珥卒逝條、四十九頁

(九十四) 註九十一に同じ

(九十五) 註九十二に同じ

(九十六) 國朝謄目、卷五十一(寫本)

(九十七) 磻宮雜記、前掲

(九十八) 竹窓閑話、大東乘所收、第十三冊、三五—一二頁

(九十九) 增補文獻備考、卷一八七、選舉考四、科制四、五丁裏

(百) 同上、六丁裏

(百一) (百二)同上、十八丁

(百三) 文庭雜議、卷一、李弘德論李熙協禹冀漢事條(寫本)

(百四) 於于野談、燃藜室記述、別集、卷十、三頁所引

(百五) 增補文獻備考、卷一八八、選舉考五、科制五、一丁

(百六) 大典會通、卷三、前掲、一一七頁

(百七) 牧民心書、卷十九、戶籍條(寫本)

(百八) 註九十八に同じ

(百九) 燃藜室記述、卷二十一、科場行私之條條所引、七十一頁

(百十) 金時讓、荷潭錄、日月錄、同上、卷二十、朴應犀之獄所引、一頁

(百十一) 同上

(百十二) 淳昌文官廬方辰所記、同上所引

(百十三) 光海日記、同上、二丁以下

(百十四) 同上

(百十五) 註百十に同じ

(百十六) 同上

(百十七)(百十八) 江上同外、燃藜室記述(朝鮮古書刊行會本)續集、卷三、庚申大黜陟許堅之獄條所引

(百十九) 同上所出、大諫柳僑運正言李彥綱請啓

(百二十) 日月錄、燃藜室記述、卷二十四、李适之變條所引、四頁

(百二十一) 默齋日記、同上、三頁

（百二十二） 荷澤錄，同上，四頁

（百二十三） 同上，十三頁所出

（百二十四） 紫海筆談，大東野乘所收，第十三冊

（百二十五） 安邦俊，混定編錄，卷五，大東野乘所收，第十二冊，四九七頁

（百二十六）（百二十七） 功臣錄，國朝寶鑑

（百二十八） 李廷馨，東閣雜記

（百二十九） 燃燄室記述，卷八，辛巳安處謙之獄條，十六頁

（百三十） 同上，十七頁

（百三十一） 南襄撰，柳子光傳，燃燄室記述，卷六，戊午史禍條，六七頁

（百三十二） 同上，六九頁

（百三十三） 柳光翼，楓巖輯語，同上，卷七，中宗朝己卯禍源所引，四三頁

（百三十四） 李仲悅，幽憤錄，同上，卷十，明宗朝乙巳黨籍，尹任條所引，四六頁

（百三十五） 許箕，野言別集，同上，明宗朝乙巳士禍條所引，二〇頁

（百三十六） 己丑別錄，乙丙照鏡鏡，同上，卷十四，宣祖朝己丑黨籍，白惟禎條所引，四二頁

（百三十七） 己丑別錄，同上，四三頁

（百三十八） 掛一錄，同上

（百三十九） 安邦俊，混定錄，燃燄室記述，卷十四，八一九丁，宣祖朝己丑鄭汝立之獄條參照，鄭汝立之獄は他に興味ある人物多きも茲では暫くこれを略す。

（百四十）（百四十一） 同上

（百四十二） 東閣雜記，己卯黨籍補，燃燄室記述，卷十一，明宗朝鄭希之獄條所引，一二二頁

（百四十三） 燃燄室記述，卷二十四，仁祖朝宋給諫告之獄條所出，四四頁

（百四十四） 週川集選用代擲，同上，四六頁所出

（百四十五） 龜巖集，卷十，行狀，丙戌疏，附錄，伸寃疏，華山罷黜錄，二五十六丁

（百四十六） 淳昌文宣派方辰所記，燃燄室記述，卷二十，二頁

（百四十七） 同書，三十六丁

（百四十八） 幣原氏，朝鮮政爭志，七一頁以下

（百四十九） 李建昌，黨議通略，原論，朝鮮光文會版本，一〇〇頁

（百五十） 朝鮮政爭志，六四頁

（百五十一） 史學誌雜，二十七卷，三號，朝鮮に於ける黨争の原因及び當時の狀況

（百五十二） 龜巖集，卷十，行狀，二丁

（百五十三） 同上，附錄，伸寃疏

（百五十四） 華山罷黜錄，二十五十六丁

（百五十五） 龜巖集，卷十，丙戌疏，七丁

（百五十六） 掛一錄，燃燄室記述，卷十四，所引

（百五十七） 東西分争に關する全般的の研究はこれを別の機會に考察する必要がある。

（百五十八） 黨議通略 上掲

（百五十九） 燕巖續筆，補遺，三十丁裏

（百六十） 增補文獻備考，卷一九四，選舉考十一，詮注三，八丁

（百六十一） 同上，卷一八七，選舉考四，科制四，七丁

（百六十二） 同上，一八六，二十二丁裏

- （百六十三） 註百五十九に同じ
- （百六十四） 註百六十に同じ、同二十二丁
- （百六十五） 同上、二十二丁裏—二十三丁
- （百六十六） 同上、二十三丁
- （百六十七） 大典會通、上掲
- （百六十八） 同上
- （百六十九） 增補文獻備考、卷百八十七、十八丁
- （百七十） 同上、二十丁
- （百七十一） 同上、卷百九十四、上掲、二十一丁
- （百七十二） 同上、百八十七、上掲、三十一丁
- （百七十三） 國朝榜目、卷十一、英宗朝部
- （百七十四） 東洋文庫所藏の寫本には此例の第二第三には庶子又は妾子と明記せず、今俄かに眞偽を判じ難い。
- （百七十五） 增補文獻備考、卷百九十五、二十九丁
- （百七十六） 同上、三十三丁
- （百七十七） 同上、三十五丁
- （百七十八） 同上

追記 本文は數年前の舊稿を抜抄簡約したものであるが、本稿結成後に集得した多くの資料を加へて整理補訂する程なく遺憾の點が少くない。又此問題を考定するに必要な「奕史」を見ることができなかつたことも遺憾の一つである。何れ機を見て補正を加へなければならぬと思ふ。尙ほ私をして此種朝鮮社會史的問題に興味を囑ふるに至らしめたについて、學恩を負ふ先生と學友が少くないが、未だそれらの氏名を列記するほどの効績のないことを恥ぢて敢えてこれをなす勇氣がない。茲では取敢へず本論に對する前田孝作氏の懇切な御注記に深甚なる謝意を表するに止めたいと思ふ。併せ記して自責と感謝の念を表す所以である。（一九三二・五月）